世界で一番、優しい魔人

まいるど せぶん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界で一番、優しい魔人

【Ｎコード】
Ｎ２３５１ＢＡ

【作者名】
まいるど　せぶん

【あらすじ】
倫理感の欠如した『冷酷な』少年、暮井雄は、ある日一冊の魔導書を見つける。
ものは試しと、そこに記された召喚術を試してみた雄は、儀式の手順を間違え、逆に自分が異世界へ召喚されることになった。
召喚の魔方陣を通ったことで、悪魔の力を得た雄は、魔人と呼ばれる存在になり、暴れまくる。
しかし、悪の象徴であるはずの魔人の中では、現代日本という環境で育った雄は、断トツで人間に優しかった。

優しくない少年は、なぜか『優しい魔人』として名声を得ることになる。

序幕

幼い時分より、よく「人としての倫理観が欠如している」と評されたものだった。
要するに俺様は、優しさというやつを他の人間とは違った次元でしか持ち合わせていないらしい。
もちろん、理屈の上では理解できる。悪口を言えば傷つく。傷つくのは嫌だ。だからダメだ。そんなことは、嫌というほど教わった。
だから、理性的に生きる限りにおいては、俺様とて大きな問題は起こしていない。
虫くらいなら迷わず殺すが、どうせゴキブリなんぞいくら殺そうが、誰も俺様を恨まないだろう。

「……あん？　なんだこれ」

そんな俺様だが、家はヤクザでも何でもなく、それどころか由緒正しいお金持ち。
なんとなくーー本当に、何の意図もなく、家の倉庫を漁っていると、革の表紙で設えられた、古くさい本が目を引いた。

「これ……もしかして、人間の皮膚を加工してんのかぁ？　いくら何でも、俺様でもこれは趣味が悪いと思うが……こんなもんを保管してるとは、親父も俺様を説教できる義理はないな」

表紙に文字はない。出版物ではなさそうだ。
とりあえずパラパラとページを捲っていると、どうも外国語で書かれたものらしく、文字は読めなかった。
読めないどころか、上下すらわかんねぇ。
仕方なく、放り投げようとしたところで、挟まっていたらしいメ

モ用紙がはらりと舞い落ちる。
傷んだ髪だが、こちらは手書きの英語で走り書きされており、多少は読み解くことができた。
「なになに……召喚術？　騎士……悪魔……エリゴール？」
要約すると。
この本は召喚術について記された魔導書で、このメモに書いてある儀式を行うと魔術が行使できるらしい。呼び出せるのは、エリゴールとかいうどこぞのティッシュのような名前をした、騎士の姿の悪魔。
実のところ、俺様はオカルトの類いは嫌いではない。
むしろ、圧倒的な未知の力で人を蹂躙してみたい。
だから。
暇潰しに、ここに書いてある内容を訳して、エリゴールとやらを召喚してみようと思った。
メモが挟まっていたページに描かれた魔方陣。図解を見る限り、ヘビの血を使って描くらしい。
「ま、人生何事もチャレンジだよな」
たぶん、社会的にはチャレンジしてはならない方向性なのだろうが。
俺様は、とりあえずヘビをどこで盗み出すかを考えることにした。
ーーこのとき、俺様は知らない。
わけのわからぬ外国語に苦戦した結果、儀式の手順を間違え。

エリゴールではなく、俺様自身が召喚の魔方陣を通り抜けてしまうことを。

1．魔人誕生

どうしてこうなったのか。
黒光りする甲冑を纏い、手には長い槍を握っている。
あの本で見た、エリゴールの挿し絵。そのままの姿だった。
と言っても、池の水面を見る限り、強面な顔と燃えるような赤毛は、元の俺様のままのようであったが。

「……どうせ挿し絵の再現すんなら、馬もセットで付けやがれってのの」

よくわからない方向性にキレながら、俺様ーー暮井雄（くれいゆう）は池に小石を投げた。

「うおっ」

しかし、力任せに投げた小石は、凄まじい勢いで水面を突き抜け、底まで届くと、水を吹っ飛ばしてクレーターを作り上げた。
状況を整理しようと思う。
召喚の儀式をどこかでミスしたらしく、逆に俺様が異世界に召喚されてしまった。さっき、口から火を吹く魚を殴り倒したので、少なくともここは地球ではない。
また、異常な戦闘能力を獲得したことも、間違いなさそうだ。たぶん、エリゴールとやらの力が俺様に宿ってしまったのだろう。
見た目からして、もともと戦いに適した悪魔なのは間違いなさそうだが、とりあえずシンプルな力の悪魔と合体したのはラッキーだった。よくわからんやつのよくわからん力よりは、よほどいい。
さしあたって、問題は。

「これからどうするか……だな」

それほどもとの世界に未練があるわけでもないが、やはり見知らぬ世界は何かと不安だ。類推できる情報には限度がある。

さっきの火を吹く魚のようなやつがいる以上、戦闘能力というのは間違いなく商売の資本になるはずだ。よって、金銭面はそれほど心配する必要もない。まぁ、貨幣制度があり、人間が文明を築いていればの話だが。

技術の発展度合いや、文明の持つ独自性というものは、ある程度仕方がないとはいえ、とりあえず不安なのは言語だ。

言語が通じないと、行動を取るのは難しい。

もとの世界に帰る方法はいずれ探すことになるだろうが、生活は言葉なしで送れても、これは確実にコミュニケーションを要される。

考えることが、多すぎた。

（頭おかしくなりそうだ）

イカれるくらい殴られたことはないはずだ。殴ったことはあるが。だから、俺様は正常なはずだが、状況の方が特殊すぎると、こっちも変になりそうだった。

とにかく、腹も減ったし町を探すか、と立ち上がる。

その瞬間、俺様の耳に金切り声が聞こえた。

「た、助け、助けてぇーっ！！」

どうやら、異世界生活最大の懸念は、解決したようだった。

◆◇◆◇◆◇◆◇

俺様が我ながら驚くほどの速さで参上すると、すでに現場は惨状だった。
死屍累々、鬼哭啾々。
よくファンタジーゲームなんかで並んでそうな騎士甲冑を纏ったオッサンたちが大量に倒れている。
アホみたいにでかい馬車からは、この集団のリーダーなのか、いかにも貴族といった服装のナイスガイが生首を覗かせていた。あ、ついでに馬の方も。
この場で明白に生きている魂は、俺様を除けば2つ。
ホームレスでも今時もっとマシな服装をしているんじゃねぇかってくらい貧相なボロ布を巻いた女の子。他に女はいないから、さっきの悲鳴はこいつだな。
彼女がブルブルと震えながら短剣を向けているのは、大きな化け物だった。
これから、彼女の華麗な一撃が、あの化け物を粉砕するーー

（なんてわけ、ねぇよなぁ）

少女は、どう見ても戦いに精通した様子ではない。
いや、俺様だって精通はしていないが。
とりあえず、大義名分と戦闘能力があるのだ。動物殺しを楽しんでも、咎められるまい。

「おい、嬢ちゃん、そこどきな」
「えっ……？」

槍をくるりと回し、映画の見よう見まねで構えてみる。
体長６メートルはあるかという化け物は、ムカデとサソリをくっつけたかのような姿をしていた。

「死ねやコラァ！！」

ジャンプ。
軽く跳んだだけなのに、悠々と樹木より高く舞い上がる。
化け物は、こちらに狙いを定めたらしく、大きな鋏を振るってきた。
あー、こりゃ壊滅して当然だな。普通の人間じゃかわせねぇわ。
でも、俺様はついさっき普通の人間なんかじゃなくなった。
鋏を槍で受け止めると、腕の上を走り、根元まで辿り着く。
右腕を引っこ抜くと、化け物は苦悶の声を上げた。
……いや、お前口無いだろ。
ふざけた生物だ。万死に値する。
槍を、一閃。
化け物の甲羅が、あっさりと斬れる。
その隙間を狙い、槍を全力で突き刺した。

「またつまらぬものを斬ってしまった……」

いや、刺したんだけれども。
まぁ、トドメの一撃であることに変わりはない。
よく、漫画で剣を振ると斬撃が飛ぶが、アレの刺突バージョンとでも言うべきなのか、俺様の一撃は化け物の体内をも貫き、衝撃波で後方の木々をも薙ぎ倒した。

「す、すごい……」

喉の奥から絞り出したかのような声が、女の子の口から漏れる。
驚いているのはむしろ俺様の方だったが、それは押し隠して、俺様は腰の抜けた彼女を助け起こすのだった。

2. 奴隷従属

奴隷とはまた、何ともそそる響きである。
俺様が結果的に助けた女の子は、奴隷身分に属する人間らしく、はじめのうちは俺様と話すのも恐る恐るといった調子だった。

「魔人？」

名は、メイル。奴隷に姓はないそうだ。
見た目だけなら、まぁ可愛いんじゃないかと思う。紺色のセミロングの髪は、手入れさえすれば整った顔だちをさらに引き立てるだろう。体だって、栄養をしっかり摂れば、年相応の少女らしいものになるはずだ。
生まれる場所さえ違っていれば、化粧も知らない中学校のガキどもの中では郡を抜いた可愛さから、人気者になっていたに違いない。

「はい……私たちは、魔人の進撃を止めるお手伝いのために、この森へ来ていたのです」
おどおどとした調子で、俺様に語るメイル。
ここは、例の惨劇の現場から、少し離れた場所。
生き残った僅かな兵をメイルが手当てし、野営地をメイルが設営し、今は俺様と二人で焚火を挟んでいるところである。
「いまいち、状況が掴めんな。俺様、遠い遠い国から来たから、魔人だの何だのはよくわからんのだ。教えろ」
「ま、魔人っていうのは、とても強大な力を持った、恐ろしい存在です。その拳は山をも砕き、その魔力は枯れることなしと言われてます。人間を食べることを快楽としており、自らの野望のためだけに生きる、傍若無人な……人類共通の敵です」

ふむ。
生憎、食人に興味はなくもないが、俺様はフツーに料理食えれば食事はそれでいいからなぁ。
友達にはなれそうにない。

「続けろ」
「はい……く、クレイ様だったら、ひょ、ひょっとして、魔人にも勝っちゃうんじゃ……」
「さぁな。んなことは知らんから、続けろ」
「あぅ……すみません。魔人は、常に人間の敵ですが、大抵は生け贄として人間を捧げることで、その被害は最低限に抑えられています」
「でも、時折、欲望のために暴れる野郎もいると。で、今回は、そいつが食料を手にいれるためだか何だかは知らんが、攻めこんできたと」

俺様が言うと、メイルはこくこくと頷いた。
ま、そうだわなぁ。国の中枢部を力ずくで抑えりゃ、食料である人間は簡単に集められるし。
が、俺様はそれが最善とは思わんね。俺様なら、力ずくではなく、影から国を操る。

「そ、それで、我が国最強の騎士団、フリミアリッターが討伐の任に就くことになったのですが、生憎王都からは遠くて。それで、地方領主である御主人様とその私設部隊が、足止めのために、魔人の通過が予測されるこの森へと派遣されたのです」
「お前、戦えんのか？」
「むむむ、無理ですよぅ。私は、馬車を引いてきて、皆さまのお世話をしてただけです、ほんとに」

だろうな。
戦えるようには到底見えん。
っつーか、状況を見る限り、『ボス戦に挑もうとしたら中ボスにフルボッコにされた』ようにしか見えないんだが。
非戦闘要員のメイルはともかく、騎士までこんな雑魚なら、これまでどうやって魔人から身を守ってきたんだろうか。

「勝てるのか？」
「え？」
「ナントカって騎士団はよ、魔人とやらに勝てるのか？」
「人間の中にも、強い人はいますから……一対一で勝つことはできないにしろ、数で圧せば多少はなんとかなります。今回は、やってくる魔人もまだ子供みたいですし」

それから、メイルはつらつらと魔人について教えてくれた。
どうも、魔人の襲撃を止めてくれる魔人もいるらしい。無論、対価は生け贄だけどな。国ごとやられるよりマシってわけだ。
要するに、魔人ってのは歩く災害だと俺様は理解する。なんとか人類は力を合わせてそれを乗りきってきたのだ。

「それはそうと、お前。御主人様が死んでしまったけど、その場合、奴隷ってどうなるんだ？」
「奴隷は……奴隷ですから。逃げてもいずれ捕まるでしょうし、大人しく奴隷市場に行って新しい御主人様を探します。あ、でも、またあんなに痛いことされるくらいなら、ここで魔人にやられた方がマシかも……あはは」
笑うような台詞ではないと思うのだが、確かにメイルは笑っていた。
こいつの境遇に同情するような俺様ではないが、見知らぬ貴族に

こいつが使役されるよりは、俺様の手で飼い慣らした方がいいのかなーって気はする。
異世界初心者の俺様には、ガイド役が必要なのだ。
その点、メイルはさっきの魔人の話を聞く限り、物事を説明する能力はありそうだし、何より奴隷身分ということで命令されることへの適性が高いから、うってつけだ。
ボディーガードは必要としてないので、こいつは俺様のガイド役として十分な能力を有している。

「……メイル」
「は、はい。あ、ごはんですか？　ごめんなさい、さ、さっきの魔獣に食糧をかなりやられて、あんまり残ってないんです。こ、これだけ……」
「あ、うん。すまん」

出鼻をくじかれてしまった。
メイルの差し出した、林檎のようなものは、２つ。
満足な量とは到底言えんが、仕方ないか。
奴隷なら、多少我慢するだろと思った俺様は、林檎もどきを２つともぶん取り、片方は槍で真っ二つに切って、その半球のみをメイルに渡した。
俺様は、一個半。メイルの三倍だ。
しかし、メイルは、驚いたような表情で俺様を見た後、予想外の反応をしてみせた。

「いいい、いいんですか、こここんなに頂いて」
「はぁ？　なんだ、もっと少ない方がいいか？」
「いえ、ありがたく頂戴いたします……クレイ様は、優しい方なのですね。奴隷の私に、こんなにも優しく……」

優しい？　俺様が？
いやいやいやいや、おかしいだろ。他人の給食を横取りして教師に怒られたことはあるが、まさか評価が上がるとは思わなかったぞ。
普段はどんな生活送ってんだこいつ。
「私の御主人様が……こんな優しい人だったら良かったのに……」
「ーーなってやろうか？」

メイルが漏らしたその言葉。
俺様にとっては渡りに船だった。

「えっ……？」
「だから。俺様が、お前の御主人様になってやろうかと訊いているんだ」

数秒間、メイルはぽかんとしていた。
口の中に何か突っ込まれるのを待っているようにしか見えない。
突っ込んでやろうかな。
しかし、実践に移す前に、メイルは大きな瞳からぼろぼろと涙を流し始めた。

「ひぐっ……ぅ、あぅ……」

人語を発しろ。

「なんだ、泣くほど嫌か」
「ち、ちが……ふ、ふぁ……嬉し、くて……あぅぅ……っ」

なんかこいつ、ペットにしてえわ。
犬の頭を撫でるノリで、髪の毛をくしゃくしゃと押さえてやると、

メイルの涙は三割増量した。

ーーこうして。

この日、俺様は従順な奴隷を隷属させることに成功した。

2．奴隷従属（後書き）

魔人。魔神ではなく、魔人です。
主人公チート物といえば確かにそうなんですが、同レベルに強いのもいます。

3．フルボッコ

「ほ、ほんとにお一人で……？」

とか、不安げに言うメイルに、後からやって来るという騎士団と合流するよう言いつけた俺様は、翌朝ひとりで森の木の上に立っていた。

いや、立っていたというのは適切じゃないな。

浮かんでいた。

「我ながらすごいな……」

当然のように魔法という技術体系があるらしいのは、この際納得しておくとして。

飛行魔術、というものは、一応、俺様の特別な力ではなく、ちゃんと存在するらしい。

メイルは、風と無の複合属性である空属性がどーのこーのとほざいていたが、あいつ自身は魔法が使えるわけでもないので、また魔法使いと知り合ったときに詳しい話を聞こうと思う。

何にせよ、飛べるのは嬉しい。

俺様は、魔人のガキがやってくるという方向を見つめながら、ぼんやりと魔法もどきを試していた。

風と無の複合属性とやらが使えるのなら、たぶん風は使えるだろう、とテキトーに試してみたら、小さな竜巻程度なら起こせた。

しかし、無属性とやらの方は、いろいろ試してみても、何も発生しない。

（……あほメイルめ。魔法には詳しくないと素直に言えばいいものを）

どうも、自分は無属性とやらには縁がないらしい。
役に立とうと見栄を張ったメイルが、間違った解説をしたようだ。
仕方ないから、他にありそうな属性を試してみるか、とため息をつく俺様だが、そのタイミングで前方から強烈な気配に襲われる。

「……来たか」

唐突に、前方から炎の塊が迫る。
小手調べって感じらしく、噂の魔人の本気の一撃とは思えない。
とりあえず、槍でそれを払うと、炎は爆散し、一瞬だけ俺の視界を埋め尽くした。
その一瞬を逃さず、炎を突き破って、小柄な影が突進してくる。
炎の目隠しで反応が遅れたが、なんとか対応できるスピード。
そいつの拳を槍の柄で受け止め、ようやくの対面となった。

「よぉクソガキ」
「誰だか知らないけど……僕の邪魔をする気？」
「その通りだ」

力任せに槍を振り抜くと、クソガキの体が吹き飛んでいく。
追撃。小さな竜巻を生み、それを叩きつけた。
しかし、それを呑み込むように、クソガキが落下したあたりから、巨大な炎の蛇が現れる。

「うおっ……」

大口を開けて迫る炎の蛇。
俺様は、槍をぐるぐると回すと、そこに風をまとわりつかせ、蛇へと突き立てた。

すると、回転する衝撃波が蛇を貫いた。

「ーククク。格の違いを教えてやろう」

振り向くことすらせず、俺様は槍を背後で構える。

不意討ちのつもりだったのだろうが、背中に攻撃しようとしていたクソガキの拳は、俺様の槍に阻まれた。

「クハハハハ！！」

体の奥から力が沸き上がる。

笑い方が変わってしまうくらいに。

「こ、こいつ……っ！！」

振り向き様の回し蹴りから、槍での連撃。

雨のように注ぐ斬撃と刺突をさばくので手一杯らしいクソガキに、俺様は竜巻をぶつけてやった。

吹っ飛んで行くその体を追い、俺様も地面へ。

木々を突き破って着地したクソガキの眼前に、槍を突きつける。

俺様がトドメの一撃を放つ瞬間、クソガキはこんなことを言った。

「ど、どうしてーー同じ魔人なのに、僕の邪魔をーー」

◆◇◆◇◆◇◆◇

騎士団に会うべく、とてとてと街道を走っていたメイルは、人生でも五指に入るほど驚いた。
突然、目の前に新御主人様が現れたからだ。

「きゃぁぁぁぁあっ！！」
「よぉメイル」
「きゃーっ！！　きゃーっ！！」
「メイ……」
「ひぁぁあぁぁぁあああ！！」
「落ち着け」

新御主人様ことクレイに頭を撫でられ、メイルは顔を赤くしながら落ち着いた。
正直なところ、御主人様が本当に魔人に勝てるのかという不安はあった。
だが、杞憂だったらしい。

「ご、御主人様……よくご無事で。まさか、本当に魔人を倒しちゃうなんて」

蕩けるような心情で、メイルはクレイにすり寄る。
クレイの手では、魔人と思われる少年が、髪を掴まれてぐったりとしていた。
クレイは、一呼吸の間を空けた後、自信満々に言った。

「当然だ。どうやら俺様も、魔人らしいからな」

4．爆乳爆裂・隠密系魔法少女（前書き）

下ネタ注意。

4．爆乳爆裂・隠密系魔法少女

「というわけで、我々の任務はこれより、魔人クレイ殿を王都へと護送することに変更された！！　最前列右端のお前！！」
「は、はい！！」
「事の経緯をしたためた手紙を、王宮へ送れ！！」
「はい！！」

目の前で繰り広げられる騎士の集会に、俺様は感心した。よくもここまで徹底した姿勢で団長の話を聞けるものだ。
団長のような一部の猛者はともかく、普通の騎士は団長の後ろに立つ俺様が怖くて仕方がないだろうに。

「……クレイ殿」
「なんだ」
「世話役をお付けいたしましょうか」
「要らん」

メイルがいるからな。

「しょ、食料は……」
「人間は食わん。皆と同じのを用意しろ」

騎士団長との会話を聞き、騎士たちからざわざわと驚いたような声が漏れた。
ま、人間を食べないって部分はあんまり信じていないようだが、それでも彼らの中での魔人のイメージとは随分違うようだ。

……現状を、簡単にまとめよう。

太陽が高く上った真っ昼間に、俺様とメイルは例の騎士団に遭遇した。
はじめは、俺様が討伐対象の魔人と間違われ、攻撃されたりもしたのだが、数人ほど反撃がてらぶっ飛ばしたり、本物の遺体を見せたりして、ようやく事情の説明へとこぎつけた。
団長に、報奨金は出るのかと問いかけたところ、王様に直接会って掛け合うために、王都まで同行することになった次第である。

「あー……そうだ。ひとつだけ、頼みはなくもない」

彼らにしてみれば、魔人を討伐しにきたら魔人を連れ帰る羽目になり、混乱の極みだろう。

「は、何でしょう」
「夜営のときでいいから、この討伐隊の中で優れた魔法使いを選出し、俺様を恐れないやつを探して連れてこい」
「りょ、了解いたしました」

無論、魔法とやらについて知るためである。
ただ……魔人を相手に、ハキハキと説明できるやつがいるかどうかは、いささか不安だが。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「これを……こうして……どうだ、メイル。これは箒だ」
その晩、俺様は、与えられたテントで、メイルと遊んでいた。
そこら辺にあった紐を使って、あやとりを教えてやると、メイルはキラキラと目を輝かせる。
「す、すごいですっ」
こんな小手先の遊びで、人心を掌握できるのだから楽なものだ。
それにしても、メイルは筋が良い。もともと、奴隷として様々な仕事をこなしていただけあり、手先は器用なのだろう。
麻の寝袋の上で二人、向かい合っていると何か楽しい。
メイルは間違いなく美少女なんだが、妙に俺様の性欲が反応しないんだよなぁ。
ペット感覚でフツーに愛でたい。
「……あ、そういえば、御主人様」
「なんだ」
「もうこのカンテラ、油が尽きかけてますけど……もらって来ましょうか？」
ひとつのテントには、ひとつのカンテラが配置され、煌々と空間を照らしている。
俺様とメイルにテントを奪われた哀れな騎士もいるようだが、とりあえず広さも明るさも二人で過ごす分には快適だった。
「うーむ……確かに減ってるな。よし、行ってこい」
奴隷とはいえ、主人が魔人なら、そう邪険に扱われることはないだろ、うん。

メイルをいじめるやつがいたら、俺様ふるぱわぁで殴っちゃうぞー。

「では、行ってきます」
「おう……いや、待て」

不意に、何かの気配を感じ取り、俺様はメイルを胸元に抱き寄せて周囲を警戒する。
気配が揺らいだのを認識し、頭上へと掌を向ける。
テントの布の隙間から飛来した、針のようなもの。それを、手で受け止めると、小規模な爆発が巻き起こった。

「おおっ。今のに反応するとは、さすがは魔人でござるな」
「……誰だてめぇ」

いつから潜んでいたのか。
眼前に、ひとりの女が降り立つ。
ござる口調の人間に、まさか異世界で遭遇するとは。

「やだなぁ、クレイ殿が呼んだのでござるよ？　魔法使い」
「あー……なんだ、てめぇ魔法使いなのか。忍者みたいなことしやがって」
「うんにゃ、忍者で正解でござる。魔法忍者のサクナ・アサイ。属性は、火と土の複合で爆でござる。以後お見知りおきを、でござる」
「おぅ」

サクナ・アサイは、子供っぽい無邪気さと、大人びた色っぽさを併せ持つ美人だった。
年齢は、俺様と同程度か、少し上だろう。

白を基調とした衣は、どこか和服を彷彿とさせる。胴体部分から足元にかけては、かなり身軽ですっきりとした、いかにも忍者的な意匠だが、袖は魔法使いのローブのように大きく、かろうじて指先が見える程度だ。
大きく露出した肌がエロいがーーそれよりも、爆乳っぷりが目立つ。
ついでに言えば、後頭部で結わえられた明るい桃色の髪も目立つ。

「ご、御主人様、忍者って何ですか？」
「忍者ってのは、あれだ。暗殺とか偵察とか、そういう隠密行動の専門家だ」
「まさしく、その通りでござる。サクナは、騎士団長殿の警護に就いていたでござるよ……っと、カンテラ用の油、サクナが持ってきたから置いておくでござるー」
「おう、助かる」

なかなかできるやつらしい。
美人だし、気に入った。

「それにしても、忍者について知っているということは、もしかしてクレイ殿、極東の出身？」
「ま、そんなところだ。お前もか？」
「うい、サクナもでござる」

日本に近い性質の地域があるようだな。
きょとんとした表情のメイルを放置しつつ、サクナと話す俺様。
うむ、いい乳だ。

「サクナは、俺様が怖くないのか？　魔人だぞ？」
「んー。サクナ、前方偵察で先行してたから、実は騎士団に合流す

る前からクレイ殿を監視してたでござる。で、面白そうな人だなーと」

俺様たち、見られてたのか。

メイルにおすわりとお手を仕込んだり、メイルに恥ずかしいセリフを大声で叫ばせたり、メイルのお尻触ったりしてたのを見られてたら、ちょっと嫌だな。

それにしても、いい乳だ。

「それで。サクナは何すればいいでござるか？　夜枷？」

「それも素敵だが、魔法ってやつについて教えてほしくてな。俺様、極東の中でもかなり田舎の出身で、文化も技術も何も知らんのだ」

「うい、了解ですでござるー」

サクナが指を鳴らすと、地面の土が壁のように盛り上がる。

その壁に彼女が指を這わせると、俺様は読めないが、何やら文字が描かれた。

よく見ると、微小な爆発で壁を砕いているようだ。

「では、魔法講座でござる」

長年の癖か、こういうときは座って話を聞く方が自然だ。

俺様が麻の寝袋の上に座り直すと、メイルもとてとてと隣に正座した。

☆

まず、基本の基本から説明するでござるよ。
「火」「風」「水」「土」「無」の基本属性と呼ばれるものが、この世には存在しているでござる。

誰でも、二つの基本属性を宿していて、その複合属性を自分の属性として名乗ることが多いでござるな。
サクナは、さっきも言った通り、火と土で爆でござる。
同じ属性を二つ宿している人は、複合属性じゃなく、二重属性と呼ぶでござるよ。
風と風の二重属性で、嵐……みたいな。

ただ、この属性というのは、言わば偏りでござる。偏りゼロを無として、どんな方向に傾いているのかを属性と呼ぶでござる。
だから、対面方向にある火と水なんかには同時に傾くことがないので、複合属性は存在しないわけ。

図解すると、こんな感じでござるな。

嵐
風
氷　空　雷
海―水ー命ー無ー光ー火ー炎

樹　金　爆
＼／
土
／＼
地

補足すると、金というのは錬金術でござるな。
命は回復系。
二重属性はすべて、基本属性の強化版みたいな？
基本の基本編はこれで終了でござるー。

☆

ふむふむ。
なるほど、なんとなくわかった。
せっかく描いてくれた図は、生憎字が読めない俺様にはわからなかったが。
「よし、そこまでいい。それ以上のことは、追々学ぶとしよう」
「うい。属性調べ、してみるでござるか？」

「いや、いい」

俺様の基本属性のうちひとつは風と確定している。
つまり、風の二重属性か、風と火または風と水の複合属性となる。
とりあえず、右手から炎を出してみた。
――出た。

「あれ、魔法使えるでござるか？」
「感覚的にな。理屈はわからんでも、テキトーに力込めたら出る」
「さすが魔人……常識は通じないでござる」

右手に火、左手に風。
二つを混ぜるイメージでぶつけてみると、雷が生まれた。
なるほどなるほど。
こんな感じか。

「――ところで」

そんなことより、俺様の興味はもはや他に移っているのだ。
おっぱいだよおっぱい。
断言する。サクナはえっち上手い。
俺様は、メイルの両耳を塞ぎ、サクナに向き直る。

「サクナ、お前、いい女だ。俺様の本能がそう言っている。ヤらせろ」
「ほ？」
「俺様はお前を抱きたい」

サクナは、目をぱちくりさせ、呆けた顔で俺様を見た後、ニヤリ

と笑った。

「そこまで単刀直入に言われると、なんだか不思議と断れないでござるなぁ……でも、サクナくのいちだから、暗殺するときとかにいろんな男とヤりまくりでござるよ？」

「かまわん」

別に処女だろうがビッチだろうが、どうでもいい。

俺様は、メイルの両耳から手を離す。

「メイル」

「は、はい」

「ちょーっと、俺様が呼びにいくまで、あっちの広場で火を焚いて夜食でも作ってろ」

「りょ、了解です」

仕事を与えられて嬉しいのか、メイルは顔を輝かせて走っていった。

ま、あいつに見せるわけにはいかないからな。

「よし、来い、サクナ。このまま俺様の女になれ。俺様はお前が気に入った」

「それはゴメンでござるー」

サクナは、手慣れた様子で俺様の隣に寄り添ってくる。

クハハ。

では今夜は、お楽しみといこうか。

4．爆乳爆裂・隠密系魔法少女（後書き）

まぁ、主人公の性格が性格ということで。
こういう場面は、これからもたま～にあると思います。

5．プレゼント

騎士団は、決して軍隊ではない。
いわゆる軍隊のイメージほど厳しい雰囲気でもなく、数日も旅路を共にすると、俺様の存在に馴染むやつもちらほらと現れた。

「あ、クレイ様」
「おっす」
「昨日はご自身の分の夕食を分けてくださって、ありがとうございました！！」

いや、あれは苦くてクソ不味かっただけだ。
っつーか、その程度で感謝されても困る。あんな不味いもの押しつけられて喜ぶとかドMかよ。
俺様は、なぜか勝手に好感を持ってくれる騎士たちに別れを告げ、森へと歩いていく。

どうにも、夜しかこうして行動できんというのは不便だな。
昼間はひたすら道を歩いているから仕方がないけど。
意外なのは、さほど体力に優れていないメイルも疲れる様子なくついてきていることだ。たくましいやつめ。

「メイル」
「は、はい」
「ごめんな、ちょっと魔獣狩りをするかもしれんから、ここで待っててくれ」
「ご、ご武運を」

感心した目で見るんじゃねぇ。

ボランティアで治安維持しようなんて、俺様は考えてないぞ。
これはひとえに、お前のためなのだ、グフフ。
ペットには『アレ』が必須だからな。

さぁ、素材回収だ、素材回収。

◆◇◆◇◆◇◆◇

「言われた通り、この近辺に生息する魔獣について調べておいたでござる」
「よし」

さすがサクナ、俺様の女だ。
サクナは、昼間は先行して状況を団長に報告する仕事があるため、こうして夜に合流することになる。

「それで、どうするつもりでござるか？　皮を加工できそうな魔獣は、一応四種くらいいるみたいでござるが」
「首輪だ」
「は？」
「メイルに、俺様のものだという印として、首輪をつける」
「奴隷用の首輪なら、街で売ってるでござるよ？」
「俺様が作ることに価値があるのだ」

ここらへんは、譲れない。
俺様、工学部志望の人間だったからな。

ものづくりは好きなのだ。
たぶん、金具は錬金術の使えるやつに頼めばゲットできるし。

「では、行くでござるか」

小動物がばたばたと走るのを視界の端に見ながら、俺様たちは歩きだす。
どこかから小鳥の泣き声が聞こえた。

「あー、そういや、サクナ」
「何でござるか？」
「飛行魔術って、空属性なのか？　メイルがそう言ってたんだが、俺様は雷属性なのに飛べるし」
「そりゃ、魔人に理屈は通じないでござるからなぁ。一応、基本的に飛行は空属性でござる。他の属性でも工夫次第で飛べるとはいえ、安定感が段違い、みたいな？」

ふーん。
魔人だから、というのは理屈になってるのかなってないのか際どいラインだが。

漠然と、俺様はサクナと話しながら、森の奥へ。

「ああ、それから、もうひとつ」
「ほほう」
「無の二重属性って、どうなるんだ？」

よく考えてみると、その説明を聞いていない。
俺様的には、虚とかそんな感じかなと思うわけだが。

「んー。これは、魔法学界でも意見の別れる難しい部分でござるね」
「そうなのか」
「そもそも、属性とは魔力の傾きのようなものでござるというのは、前に話した通り。炎であれば、火の方向に大きく偏ってる状態でござるが。無はそもそも傾きゼロなので、上位概念がないでござる。ゆえに、二重属性なしというのが一説」
「なるほど。それで？」
「無の二重属性とは、特殊能力のような形で表れる、例外的な魔法なのではないかっていうのが、もう一説。予知とか、過去視とか、そういう異能者の力になんとか説明をつけてみたって感じでござるな」
「よくわかった。ありがとう」

サクナは、キョロキョロと周囲を見回す。
視線だけ動かせばいいのに、わざわざ上半身を前傾させて可愛らしく魔獣を探しやがるから、エロい尻がこちらに向かって揺れていた。
肉欲、情欲、色欲、性欲――まぁ何でもいいのだが、とにかくこいつの体つきの色っぽさは、ふとした瞬間に邪な気持ちを抱かせる。

「サクナ、アレ見ろ、アレ」
「ほ？」
「アレだ、見えないか？」
「むー……？」
「もっとよく見ろ」

揺れる尻を、ちょうどいい位置に調整・固定。
神は拙速を尊ぶと言うが、俺様は巧速を尊ぶ。
技術の伴わない速さになど、価値はないのだ。
一瞬を逃さぬスピード。それでいて、最大限のテクニックを指先

に注ぎ込む技量。
魔人という肉体の器により得た身体能力を駆使し、俺様は指を伸ばす。
喰らえ――『聖竜の鉤爪（ホーリー・ドラゴネス・クロウ）』っ！！
「ひぁぅ……っ！？」
慈母のごとく優しい指先を、膝裏から尻まで這わせる。その間、触れるか触れないかという羽毛のような圧力で、ほんのわずかに脚の肉を感じる。
しかし、尻に到達する瞬間、天使の指は双爪へと変貌するのだ。
一秒間に、六回。乱雑に、それでいて相手に痛みを感じさせぬよう絶妙に手加減された神業で、ふにふにと柔らかな尻を揉む。
そして、締めに尻を軽く叩いて揺らし、俺様は何事もなかったかのようにもとの姿勢に舞い戻った。
「な、なな、何するでござるかっ！！」
顔を真っ赤にして尻を抑え、振り返るサクナ。
おお、愉快愉快。
「すまんすまん、あまりにお前のケツが魅力的だったからな」
「もう……そういうのは、夜中までおあずけでござる。メイルちゃんが寝た後なら、その……今夜、付き合うでござるが」
「決まりだな、わはは」
一級尻揉み師の資格を有する俺様の痴漢は、相手をもその気にさせるのだ。
避妊の魔導具ならサクナが持っているし、これからもたまにサク

ナとイチャイチャしよう。

「……っと、お前が大声出すから、雑魚どもが集まってきたみたいだぜ？」

「サクナのせいでござるか」

「さっさと掃除しろ、俺様は近寄ってきたやつだけ殺す」

いつのまにか、囲まれていた。

姿は見えんが、気配でわかる。

サクナは頷くと、指先を天に向けた。

「一瞬で仕留めるでござる。クレイのダンナは目を閉じて耳ふさぐでござるー」

「は？」

わけわからんが、言われた通りにした。

次の瞬間、爆音が響き、視界が明るく染まったことで、サクナの作戦を理解。

ちゃんとガードした俺様でもちょっとビックリしたくらいなんだ、野性の脳味噌ミニマムどもは尚更だろう。

光と音。驚かせ、感覚を麻痺させるそれは、爆属性の魔法と見て間違いない。

「とぅっ」

慌てふためいた感じで木から落ちてきたのは、爪の長いサルのような魔獣。

およそ、数は二十ってところか。

サルといっても、質感はワニのようで、上質な皮が手に入れられそうだった。

サクナは、どこに隠してたんだか、針のようなものを取り出して、指と指の間に挟むと、それをサルどもに投げつけた。
一回につき、最大八本。それを三回繰り返し、すべてのサルの口腔に、針が突き刺さった。

「終わりでござる」
「なに、もう終わったのか？」
「体が小さいでござるからな、あれくらいの毒でも、すぐ死ぬでござるよ」

なるほど。
魔人の俺様に比べれば雑魚だが、サクナはなかなか優秀らしかった。
俺様は、手近なサルに近づき、痙攣する肢体を持ち上げる。
「ふむ……良い首輪が、作れそうだ」
ニヤリと笑い、俺様は頷いた。

◆◇◆◇◆◇◆◇

意気揚々と森から戻り。
とりあえずその日はサクナと夜のお付き合いをして、次の日は皮の加工に費やして。

メイル用の首輪が完成したのは、その翌日のことだった。

「メイルー」

「あ、御主人様、お帰りなさい」

ぺこり、と頭を下げるメイル。

メイドも向いてるかもな。

「御主人様、あと三日くらいで王都に着くそうですよ」

「そうか、それより、メイル。お前にいいものをやろう」

「？」

「目を閉じてみろ」

ちゃんと飯を食わせてやっているからか、幾分か健康的になってきたメイルの体。

その首の太さは、おおよそ俺様の見立て通りだった。

困惑しながらも、期待している様子のメイルに近づき、完成した首輪をつける。

「わ、御主人様、これは……？」

「首輪だ。お前が俺様の奴隷だっていう証」

「わぁ……ありがとうございますっ」

首輪つけられて喜ぶか普通。

奴隷っぷりが板につきすぎているな。

俺様は、メイルの頭をぽんぽんしながら、首輪について説明した。

「これはな、俺様の手作りなんだ」

「そうなんですか？　すごいですっ」

「学問の盛んでないこの国のやつらにはわからんだろうから秘密に

しておく方がいいが、一応特殊効果も説明しておいてやろう」
「は、はい」
「疲れたとき、その首輪に指で触れて念じるんだ。すると、俺様が込めた雷属性の魔力が、筋肉をほぐしてくれる。普段は、思考や瞬発力の補助効果があるはずだ」

ここらへんの、魔導具としての付与効果は、ひとえにサクナのおかげである。
まぁ、充電式だからたまに俺様が魔力を注入せねばなるまいが。
「い、いいんでしょうか……私なんかが、そんな凄いもの頂いてしまって」
「いいんだよ。俺様は特別なんだから、俺様の奴隷であるお前も、特別なのが妥当だ」

俺様が言うと、サクナは飛び付いてきてぎゅっと俺様に抱きついた。
おうおう、可愛いやつめ。

「私、この首輪を一生大切にします！」
「一生？　ダメだな、死んでも大切にしろ」
「はいっ」

モノと好感度の物々交換。
単純なものだと嘲りつつも――実は、俺様もまたメイルへの好感度を上昇させているのかもしれなかった。

5．プレゼント（後書き）

お気に入り登録が１０件を越えたようで……ありがたい限りです。
今後ともよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2351ba/

世界で一番、優しい魔人

2012年1月8日20時47分発行